

19

日本バプテスト連盟ホームレス支援特別委員会 ニュースレター

発行：さいたま市南区南浦和1-2-4 日本バプテスト連盟内
ホームレス支援特別委員会 委員長代行 麦野達一

●巻頭言

谷本仰(南小倉教会)

1月20日の主日礼拝後、午後3時半より南小倉バプテスト教会にて「生笑一座」公演開催。当日は出演者とスタッフ含め計67名が公演に触れた。ちなみに昨年の外平友佳理さんの「どうぶつたちといのちのはなし」も65名の参加。こうして教会で開催される「いのちのはなし」に大勢の方が期待して足を運んでくださるようになってきていることが何より嬉しい。

奥田知志座長（東八幡キリスト教会牧師、NPO法人抱樸理事長、「蛤牡蠣衛門」を名乗る）の挨拶と紹介の後、西原宣幸さん、松葉吉一さん、松尾壽幸さんが順に登場してそれぞれのホームレス時代のことを座長との対談形式で語っていく。どれも笑いあり、涙ありの物語。西原さんはホームレス時代に仕事にしていた空き缶の収集で身につけたアルミ缶選別の業を、会場で手を挙げたKさんとの競争で披露。下別府為治さんは一人で自分の経験を語り、房野幸枝さんは「シャボン玉」の歌と自分の歩みを重ね合わせながら語り、歌う。最後に一座と会場みんなでひょっこりひょうたん島の歌を歌って踊った後、座長がまとめる。「助けてと言っている。おとなが正直に助けてといわないから、こどもはそれが正しいありようだと思いきでしまう。」「生きてさえいればいつか笑える日が来る。この人たちがその証拠。」「

休憩を挟んで短い二部。一座のひとりひとりに、生笑一座に参加して感じてきたことなどを訊いてみた。こどもたちの積極的な反応が嬉しかったことなどがあげられた。一座結成の大きなきっかけにもなった、抱樸館北九州建設に反対する地域住民を前にした地域説明会での西原さんと下別府さんの渾身の証言のことも話題に。地域の人々の間から思わず拍手が沸きあがったこと、そして説明会終了後に数名の地域の人々がわざわざ二人のところに来て感謝を伝えてくれたこと。反対一色に見えていた住民たちの中に心を動かされた人々が大勢いた。理解者が反対運動に揺れる地域の中で勇気をもって姿を現わしてくれた。そのきっかけを作ったのがホームレス経験者自身の証言。そ

れが生笑一座結成の大きなきっかけだった。そして語る彼ら自身の現在の姿が、彼らの過去と共に、確かにその未来を実証しているのだった。

今後の展開として「真・生笑一座構想」の紹介を座長がしてくれた。こどもたちに理解しやすくするため、現在の一座公演はホームレスからの脱出成功物語という単純な図式になっているが、実際はひとりひとりの人生はそんな簡単なものではない。今はさらっと触れる程度のホームレスになるきっかけの話も実は、一言では言い尽くせない大変な物語。また自立後も、それぞれ紆余曲折があり、ホームレスから自立して一丁上がり、などという単純な話では収まらない。厳しい現実を抱えて生きるおとなたちにとっては、それでも生きていこうという思いを喚起するための「真の」生笑物語が要る。そんなことだった。乞うご期待！

昨年同様、教会に全く初めておいでになった方々が幾人もおられた。当日の朝、毎日まいむ紙上で紹介記事を読み、思い切ってきてくださったという方、新聞折り込みチラシを見て来たという方も。「キリスト教徒でなくても教会の企画に来ていいのですか？」「勿論！」というやりとりもあった。この間の教会の企画、水ようごはんや聖書講座などの参加者の姿も。つながってきているのだ。「みんなの教会」として開かれていっている教会の姿が、改めて確認できたように思う。

この日のことは、後日朝日新聞地方版の頁に写真入りで掲載された。教会員のTさんの言葉が紹介されていた。「一座の人たちの命を救った言葉もあれば、SNSなどで人を傷つける言葉もある。言葉で命が救われるということを広く伝える必要があるのではと思いました。」教会は、共に生きるための、いのちを生かすための、いのちの言を分かち合う使命を負っている。アーメン、そのとおり！これからもがんばらなくちゃ、ね。

生笑一座公演を教会で開催しませんか？お問い合わせはホームレス支援特別委員会、もしくは抱樸(093-653-0779)まで。

●2018年シンポジウム報告

2018年3月3日、相模中央教会でホームレス支援特別委員会シンポジウム「共に生きる場の創造——教会は何をしているのか」が行われ、65名が参加しました。東京工業大学の上田紀行（のりゆき）教授と東八幡教会の奥田知志牧師の講演から要旨をご紹介します。

●行き詰まる時代の中で宗教の役割は？

上田紀行教授は、理工系の学生にも将来の長い旅路に備えて自由に人生を考え、社会に未来を提示していくことができなければならないという考えから、同大学にリベラルアーツ研究教育院の設置を提唱、現在その院長として運営に当たっております。

リベラルアーツ（自由学科）は以前は教養科目とも言われましたが、文字どおり人間を自由にする業でなくてはなりません。しかし今どきの学生はレポート一つ書くにもあらかじめ評価基準を尋ね、自主的にそれに合わせてよい点の取れるレポートを出してきます。ほんとうに自由市民なのか、それとも頭のいい奴隷なのか、と上田教授は言われます。そして、「今ぼくたちがこんなに豊かな社会に住みながら、何で息苦しいのか、何でそんなに生きるのが楽しくないのか。もしかしたらぼくたちはほんとうの自由な市民として生きてるんじゃないかと、いつのまにか奴隷として生きさせられているんじゃないか」と問いかけられるのです。

上田教授が『生きる意味』（岩波新書）に書かれたように、1945年のアジア・太平洋戦争の敗戦、1990年代のバブル崩壊による経済的敗戦に続いて、今日本は生きる意味の敗戦に直面しています。小泉政権以来の構造改革路線が弱者の切り捨て・使い捨てに拍車をかけています。上田教授がリベラルアーツ研究教育院の設置を提唱されたのも、新人議員たちに「あなたたちは使い捨て」と言う小泉首相にワーキングプアの支持が集まり、学生たちに「人間は使い捨てか」と聞くと半数が賛成したことにショックを受けたことがきっかけでした。信頼は、わたしたちが作り出していない限りどんどん失われていくのです。そこに宗教の大きな役割があるはずです。

そこで、上田教授は仏教に目を向けます。日本仏教を含め、大乘仏教の根本には、衆生（しゅじょう）の苦しみを何としても救いたい」という願いがあるはずですが、全国7万5000（コンビニの1.5倍）の寺の中で、苦しんでいる人の救いに力を尽くしているところが多いとは言えません。

ある学生が、生きる意味がわからなくなってプ



チ家出をしました。お寺の門を押してみましたが開っていません（警察の指導もあるそうです）。教会は開いていましたが真っ暗でだれもいません。それでもひとり朝まで座り、胸のおもしがすうっと下りていった感じがして家に帰りました。ぼろぼろになったときもう一度帰って来ればいい、だれかが支えてくれる、と感じられたのです。失敗したら死になさいと言う今の社会の中で、支えがあることを伝えるのが宗教のしごとだ、と上田教授は言われます。そう言うと、そんなのは仏教じゃない、お釈迦さまや親鸞聖人の教えを説けと言われます。それも大事だが、その向こうにある愛、仏教で言えば慈悲こそ根本ではないでしょうか。

上田教授は最後にダライ・ラマ14世の言葉を伝えられました。中国の植民地にされたチベットから亡命し、今も帰れない立場でありながら、「よき種をまけば、すぐにではないとしても必ずやよきことが起こる。そのよき種をきょうまけたと確信しているから、こんな絶望的な状況でもわたしはこんなにハッピーなのだ」とダライ・ラマは言うのです。入試に落ちたからもうだめだ、リストラされたから……と言うのではなく、その中でもよい種を一つでも巻いていくことがその人の幸せにつながる、とわたしたちの「み国を来たらせたまえ」という祈りにも通じる話で締めくくられました。

●犬年に分断線を考える

続いて東八幡教会の奥田知志牧師が講演しました。初めに『いのちの水』という絵本（トム・ハーパー作、中村吉基訳、望月麻生絵、新教出版社2017）が紹介されました。荒れ野の長い道を旅する巡礼たちののどを潤していた泉がいつしか大聖堂に囲われ、聖職者たちが水を飲める人を限定し、自分たちだけでうるわしい礼拝を行うようになる……という話です。

2018年は犬年ですが、聖書の中の犬は、町中をさまよい歩く、ごみをあさるなど、よい印象がありません。「聖なるものを犬にやるな。

また真珠を豚に投げてやるな」(マタイ7:6)というイエスのことばでは、犬や豚は異邦人や異教徒を意味しています。イエスは差別排外のヘイトデモをあと押しするようなことを言ったのでしょうか。

2016年、相模原市の障がい者施設で多数の障がい者が殺傷されました。26歳の元職員が、名前と生年月日を聞いて答えられなかった入所者を「心失者」と呼び、殺していったのでした。みずからも重い自閉症の息子を持つTBSラジオの記者がこの事件を取り上げ、「スクラッチ 線を引く人たち」というドキュメンタリーを作りました。「スクラッチ」とはがりがり線と線を引くことです。元職員が障がい者と健常者の間にがりがり線と分断線を引き、生きる意味のある命とない命に分けたように、家のある人とない人、生産性の高い人と低い人、年寄り若者と若者、正規雇用と非正規雇用、日本人と在日、ヤマトンチューとウチナンチュー、あらゆるところに分断線が引かれています。

教会はどうでしょうか。バプテスト教会は成人が理性的なことばで信仰を告白することをバプテスマの前提としています。ですから幼児洗礼はしません。しかし、それは口でしゃべれないやつは心がないと言って殺すのと似ていませんか。教会も分断線を引いていないのでしょうか。「聖なるものを犬野郎どもにやるな」というイエスのことばはどう理解すべきなのでしょう。

イエスはだれかを犬呼ばわりするどころか、当時のユダヤ教指導者に犬呼ばわりされる立場でした。イエスが、罪人と呼ばれて差別されていた人たち、障がいや病気や職業のゆえに差別される人たちを集めて「神の国はあなたがたのものだ」と言っていたのも、彼らの目には「聖なるものを犬にやる」行為と映ったでしょう。そう考えると、「……とされていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う」というフレーズを補って読みたくなります。「聖なるものを犬にやるな、また真珠を豚に投げてやるな」という非難に反論しようとしたのではないか。このような読みに神学的な根拠はないとしても、現実的な必然性があります。イエスの生きざま、日ごろのことば全体のメッセージからしても奇抜な解釈ではありません。直後の7:7以下「求めよ、そうすれば、与えられるであろう……天にいますあなたがたの父は……求めてくる者に良いものを下さらないことがあろうか」にも、直前の7:1-5の「人を裁くな(区分するな)」にもよく合います。全部与えられる、天の父なる神はよいものをくださる。ここにスクラッチはありません。敵と味方、ユダヤ

人と異邦人の分断線を乗り越えたイエス、異邦人や病人や障がい者や罪人や女や子どもと共に生きたイエスがスクラッチ、分断線をけ飛ばしていかれる。この福音を教会は取り戻さねばなりません。

聖なる書物を勝手に書き換えるなどという人もいるでしょう。が、わたしたちが聖なるものにしてしまった、つまりいのちの水を私物化し、占有してしまっただけではないのでしょうか。差別と排除の中であえぐ人たちの嘆きが教会に聞こえるのでしょうか。

分断線を認めず、聖なるものを独り占めにせず、犬呼ばわりされた人々と分かち合ったイエスに従おうとするなら、教会が持つ最大の分断線——救われた人と救われていない人、キリスト者と非キリスト者の分断線に向き合わざるをえません。天の父なる神は、よい者の上にも悪い者の上にも太陽を昇らせ、雨を降らせる方です。イエスはあの侮辱され、犬や豚と呼ばれていた人たちと聖なるものを分かち合われました。それなら、教会のなすべき伝道は、救われるためにはどうしたらよいかを教えることではなく、あなたはすでに救われているという救いの現実を伝えることであるはずです。戦争を乗り越えて90年も生きてきた人の枕もとで、なぜ「あんた、ようがんばったな。イエスはすべての人のあがないとなったんですよ。安心して死になさい」と言わないで「このまま行ったら地獄ですよ。洗礼を受けなさい」とやるのか。ローマ書3:22を読むとき、なぜ「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」ばかりに重点を置いて「そこにはなんらの差別もない」に目が行かないのか。「渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう」と聖書が言っているのに、いつから飲む人を選ぶようになったのか。ほんとに価なしに飲める水がそこにあるのです。生きる意味があるか、生きる資格があるかと問うてくる時代にあって、その事実をこそ伝道したいと思います。どんなに人間がそれを囲い込んだとしても、命の水はみずから働き出してわたしたちのところに來られるのです。



●シンポジウムに参加して(感想)

●洋光台教会 戸田美幸

今回のシンポジウムに参加して、印象的だったことは2つあります。1つ目は、スリランカでの悪魔祓いの話で、救われるのは、救われた人だけでなく、それを見ている人も救われるという話や、そのように助けてもらっているところを見て育つことによって、助けを求めることができるという話です。今の日本では他人に迷惑をかけないようにということを言われて育つことの方が多いのではないかと思います。そのことによって、助ける求め方を知らなかったり、助けを求めるのが苦手だったり、そもそも助けを求めるという選択肢すら思い浮かばないということもあるのではないかなどと考えさせられました。

2つ目は、「教会は地域を大事と言うが、地域は教会を大事と思っているだろうか」という問いかけです。教会の地域を大切にするという思いが、一方通行になっていないだろうかと考えさせられました。また、分団の時間に「このような研修会のお知らせを地域にも提供したり、呼びかけたりしたらどうか」という意見があり、私は今までそのようなことを考えたことがなかったことに気づかされました。「地域を大切にすると」言っている、本当に大切にできているだろうかと考えさせられました。今回私の教会からの出席は私だけだったので、教会に持ち帰って共有し、皆で考える時間をもちたいと思いました。

●大宮教会 久保久仁子

ホームレス支援についてじっくりと考えることができ感謝でした。具体的に何ができるか祈り求めたいと思います。

●相模中央教会 長谷川ふみか

垣根を取り払って教会を開くためのヒントと励ましをたくさんいただけて感謝でした。

●匿名希望

私はホームレスを体験していた時、支援団体や教会のホームレスパトロールなどの活動を知らないまま過ごしていました。

私の体験が何かヒントになれば良いなと参加させていただきましたが、いろんな人の意

見から新しいアイデアが生まれたこと、実際に行動している人がいるという希望を知ることができました。参加してほんとうによかったです。ありがとうございました。

●まだまだ知らないホームレス支援

「社会的孤立からの脱出」

路上生活者の支援においては、家に住める段階までサポートしたのちに半数近くの人が再び路上生活に戻ってしまう現実があります。その原因は、社会からの孤立から抜け出せず、生きる意味や働く意義を取り戻せなかったことにありました。このような人と人とのつながりに対する意欲の低下は、住居のある生活困窮者にもあてはまる問題です。引きこもり状態に陥り、外からは見えないまま孤独死の危険ともなります。そしてそのような命の危険が、さらにその子どもの困窮問題として引き継がれてしまっている現状があります。ですから物理的支援だけでは“ホーム”を取り戻せません。困窮者が増え続けている今の社会では、物質的な支援だけでなく、社会的孤立からの脱出に向けた取り組みが不可欠なのです。

申命記16:11は捧げものに関わる興味深い戒めです。「こうしてあなたは、あなたの神、主の御前で、すなわちあなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所で、息子、娘、男女の奴隷、町にいるレビ人、また、あなたのもとにいる寄留者、孤児、寡婦などと共に喜び祝いなさい。」教会でも礼拝の献金の時間には“主のご用のためにお用ください”との祈りが捧げられます。しかし、主のご用として献金が用いられていくことについて、教会は御言葉に聴いているでしょうか。命の主は、献金が「共に喜び祝う」ため用いられていくことを熱く期待してくださっていることでしょう。

(八王子めじろ台バプテスト教会 左右田 理)